心の時代

以前は教え子に役に立てばと思っていましたが、今では教え子に頼みごとをしてやってもらえる喜びを感じております。電気工事を頼めばすぐに来てくれる。お米を送ってくれと頼めば送ってくれる。法律相談を頼めば相談に乗ってくれる。年賀はがきを頼めば持ってきてくれる。ビルの部屋が空いたと言っては優先的に話をしてくる。そんな OB たちに囲まれて私は仕事をさせてもらっています。今回も中高生に仕事を紹介してもらえないかと頼めば二つ返事で引き受けてくれたＯＢがいました。ＯＢで工務店経営の宮下くんでした。仕事は何でもそうでしょうが傍で見ていることとその仕事に携わっていないとわからないことがあります。前回の OB の上野くんの電気工事の仕事もそうでした。

仕事を通してその原点になったことの話を聴くことで、単なる仕事の紹介ではなく、その人がこだわった仕事の中での生き方、生きざまを感じてほしいのです。今年もお陰様で高橋先生、平林くん、上野くん、宮下くんに協力をお願いしました。みんな手弁当で駆け付けてくれました。

彼もまた施工をする前、現場での図面と向き合います。そして素材を考え人の配置、工期を読み、段取りを整えて現場の仕事に移ります。「1 ミリでも違ったらやり直し」その中で現場と向き合います。現場を見たお客様からやはりこうしてほしいと言われれば、完成したものを壊し、やり直すこともあるとか。自分一人でするのではなく、チームですることだから職人に気を遣うとも話をしていました。彼もまた人生の転機をいくつか持っていました。建設現場の請負職人として生きてきた父親の仕事を手伝いながら、怪我をしたら終わり、仕事があるときとない時の差が大きく不安を抱えていました。そんな中、結婚をし、子供もいました。何とか安定した生活はできないものかと不安な気持ちでいっぱいだったと聞きました。しかし、どうしても自分でやってみたかったそうです。周りのみんなが反対する中からのスタートだったとのこと。

そんな彼は都大会常連校となったチームの野球部のエースでした。中学時代、準決勝の時でした。5 対 1 で勝っていた時、最終 1 イニングを残したとき、日没再試合になりました。勝ちも同然と祝賀会の話をみんなでしていたそうです。次の日、調子も悪くもなく前日と何ら変わりがなかったそうです。しかし投げても、投げても打たれ気が付くと逆転負けをしていました。相手の打者の快音が見事なほどに続き、あっという間の出来事だったそうです。しかしチームのだれも彼を責めませんでした。試合終了後、近くの公園まで無言で歩きました。そして公園で監督が一人一人の背番号を無言ではぎ取りました。それが引退の時でした。小さな心の隙。相手が勝とうとする気持ちが自分たちより数倍勝っていたのです。「あきらめたら負ける」このことを彼は相手チームから学びました。

だからどうしても自分でやることをあきらめ切れなかったのです。会社を作ること、顧客を集めること、仲間を集めることを並行して行いました。三十歳の時でした。奥様は外で働きながら陰で支えていたとのこと。そして軌道に乗るまで歯を食いしばりながら顧客回りをして、「いい仕事を早くする」ことをモットーに十九年、今では従業員を多数抱える会社にしています。彼の夢は社員にいい仕事をしてもらい業界平均より多い給与をとってもらうことを念頭に置いています。いま彼は現場に人材を派遣する仕事もしています。

彼の息子二人も野球をしていました。志学ゼミにも通ってくれていました。今、息子たちは社会人として巣立っていきました。彼の背中を見ながらまた自分の人生を歩もうとしています。いつか皆さんも後輩のために自分の仕事を通してその生きざまを伝えてくれることを望んでいます。

2025 年 1 月